

突如撤兵を行なつた。この不信義な撤兵を駐日モリス大使は「日本の誇りに対してのみならず、日本の全ての自由主義者と親米勢力に対する脳天からの一撃」と評したのであつた（細谷千博「ロシア革命と日本」）。

極東露領が赤化することは、我国にとつては満洲・朝鮮への重大脅威を意味したのであるが、太平洋を隔てた米國にとつては対岸の火事ではなかつた。この認識の差についてペイソン・トリートは

「シベリアに対する米國の関心は学問的なものに過ぎない。何故ならボルシェビキは米國の領土をいささかも危険にさらすことにはならないからだ。だが日本にとつて、それは生死に關はる問題だつたのであり、朝鮮に近いウラヂオストックに赤色政府の存在することは確かに驚愕すべきことだつた。日本が予想以上の兵力を派遣したのはこの理由によるものであり、同情すべきものがある」

と書いてゐる。また米政府首腦の全てが極東赤化の危険に対して無知だつた訳でもない。ランシング國務長官自身、その日記に

「ボルシェビキが滿鮮に浸透した場合の日本に対する危険を考へてみる時、過激派進出を阻止するため日本が十分な兵力を派遣することに反対すべきではない。何故なら、極東へのボルシェビズムの蔓延は文明への恐るべき脅威だからである」

と記して、我國の共產主義防止の努力に十分な理解を示してゐるが、日本が斯かる具眼の支持者を多く持ち得なかつたことは、アジアと世界のためにも不幸なことだつた。

第四節 慘劇——尼港事件

強姦、虐殺至らざるなし

一九二〇年初頭にはチェコ軍救出といふ出兵目的も達成されつつあり、我國も滿鮮の直接防衛以外は守備戦を縮小し、速かに撤兵する方針を声明したのであるが、ここに思ひがけぬ慘劇、尼港事件の発生を見た。

日本軍が行なつたと称される「蛮行」は、針小棒大に書き立てる我國の歴史学者、歴史教科書、新聞も、七百名を超える日本人が共產主義者に惨殺されたこの世紀の虐殺事件については、何故か口を緘して語らず、知らぬ風を装ひ、日本人の記憶と歴史の頁から事件を消し去らんと努めてゐるかの如くである。

尼港（ニコライエフスク）は樺太の対岸、黒竜江がオホーツク海に注ぐ河口に位置する市邑である。一九二〇年初頭、ここに日本人居留民、陸軍守備隊、海軍通信隊計七百数十名が在住してゐたが、連合軍が撤兵するや、ロシア人、朝鮮人、中国人から成る四千名の共產パルチザンが氷雪に閉ざされた同市を包圍襲撃、守備隊との間に偽装講和を結んで同市を支配した。彼等は仮借ない革命裁判と処刑を開始したが、遂にロシア革命三周年記念の三月十二日、我軍と交戦状態に入り、我が守備隊は大半が戦死、居留民ら百四十余名が投獄された。

この時、尼港にあつて事件を目撃した一人の我が海軍士官が、非常な辛苦の末、ウラヂオストックに脱出し、事件の手記をもたらししたが、その手記は共產パルチザンの蛮行を次の如く伝へてゐる（「大阪毎日」大正九年四月二十日付）。

「彼等過激派の行動は偶然の突発にあらずして、徹底的画策の下に実行されたものとす。すなはち左のごとし。第一段行動として、露国資産階級の根本的潰滅に着手し、所在資本階級者の家屋を包囲し、資産の全部を公然掠奪したる後、老幼男女をとわず家人ごとごとくを家屋内に押しこめ、外部より各出口を嚴重に閉塞し、これに放火し、容赦なく火中に墜殺し尽くしたり。

第二段の行動として、親日的知識階級に属する官公吏と私人とを問はず、容赦なく虐殺、奪掠、強姦など不法の極を尽し、第三段行動として、獐猛なる彼等の毒牙は着々我が同胞日本人に及びたるなり。ここにこれが実例を指摘せんとするに当り、惨虐なる暴戾ほとんど言ふに忍びざるものあり、敢へてこれを書く所以のもの、すなはち犠牲者の尊き亡霊が全世界上、人道正義のため公言するものなり。深くこれを諒せよ。

公然万衆の面前において暴徒悪漢群がり、同胞婦人を極端に辱かしてめて獸慾を満し、なほ飽く処を知らず指を切り、腕を放ち、足を断ち、かくて五体をバラバラに斬りきざむなど言外の屈辱を与へ、残酷なる弄り殺しをなせり。

またはなはだしきに至つては馬匹二頭を並べ、同胞男女の嫌ひなく両足を彼此の馬鞍に堅く結び付け、馬に一鞍を与うるや、両馬の逸奔すると同時に悲しむべし、同胞は見る見る五体八つ裂きとなり、至悲至惨の最期を遂ぐるを見て、悪魔は手を挙げ声を放ちて冷笑悪罵を浴びせ、群鬼歎呼してこれに和するに至つては、野獸にもあるまじき兇悪の蛮行にして言語に絶す。世界人類の公敵として天下誰かこれを許すものぞ、いはんや建国以来の民族血族においてをや。

帝国居留民一同悲憤の涙を絞り、深く決する所あり。死なばもろとも、散らば桜と、一同老幼相携え相扶け、やうやく身を以つて領事館に避難し、その後市街における同胞日本人に属する全財産の掠奪は勿論、放火、破壊その他暴状至らざるなし。しかりといへども軍人と云はず領事官民と云はず飽くまで彼等と衝突を避くる事に注意し、切齒扼腕、堅忍自重す。しかるに彼等過激派はますます増長し、つひに領事館に向かつて砲撃を加へ、我

が領事館は砲火のため火災を起こすに至り、もはや堪忍袋の緒も切れ万事休す。

これまでなりと自覚するや、居留民の男女を問はず一斉に蹶起して、自衛上敵対行動をとるに決し、男子と云ふ男子は総員武器を把つて護衛軍隊と協心戮力、頑強に防戦し、また婦人も危険を厭はず、敵の毒手に斃れんよりは、潔く軍人の死出の途づれ申さんと、一同双手をあげて決死賛同し、にはかに活動を開始す。

しかも全員いかに努力奮戦するも、衆寡敵すべくもあらず、刻一刻味方の減少するのみ、つひには繊弱なる同胞婦人に至るまで、戦死せる犠牲者の小銃、短銃を手にし、弾はかく込むものぞ、銃はいかに射つものなるぞと教はりつつも戦線に加わり、無念骨髄に徹する敵に対し勇敢なる最後の抵抗を試み、ことごとく壮烈なる戦死を遂ぐ。かくてもはや人尽き、弾丸尽き、力尽き、人力のいかにすべきやうもなくなほ生存の健気なる婦人または身動きの出来る戦傷者は、なんすれぞ敵の侮辱を受くるものかはと、共に共に猛火の裡に身を躍らし、壮烈なる最期を遂げたり」

壁に残る断末魔の文字

やがて氷雪の解ける頃、我国は求援軍を派遣したが、共産パルチザンは日本軍到着に先立つて五月下旬、収監中の日本人を悉く惨殺、更に尼港市民一万二千人中、共産主義に同調せぬ者約六千人の老若男女を虐殺、市街に火を放つてこれを焼き払つたのち遁走した。斯くして、石田副領事夫妻以下居留民三百八十四名(内女子百八十四名)、軍人三百五十一名、計七百数十名の日本人同胞が共産パルチザンによつて凌辱暴行された上、虐殺されたのであつた。

事件から二週間後、我が従軍記者八名が虐殺の現場を視察した。「時事新報」(大正九年六月十三日付)が掲載したその視察記の抜粋を紹介しよう。

南北一里半、東西二里半の尼港全市はベチカ（燧炬）の煙突のみ焼け残り、一望荒廢、煉瓦造りの家屋は爆破されて崩れ、木造家屋は跡方もなく焼失せり。電柱は往来に焼け落ちて、電線は鉄条網のごとく我等の足に絡み、焼け跡には婦人の服、靴、鍋、子供の寝台など散乱せり。監獄は市の北部にあり。余等は直ちに焼け残れる一棟に入る。まず異臭鼻を突くに、一同思はず顔を反けざるを得ざりき。中は八室に別れ、腐敗せる握り飯の散乱せる壁に生々しき血液の飛び散れる、女の赤き扱帯の釘に懸れるなど、見るからに凄惨を極む。最も落書の多かりしは二号室にて、「大正九年五月二十四日午後十二時を忘るな」と記し、傍らに十二時を指せる時計の図を描きあり。また「曙や物思ふ身にほととぎす」「読む人のありてうれしき花の朝」等数句の俳句を記し、また「昨日は人と思へども、今日は我が身にかかる」「武士道」等の文字、白ペンキ塗りの壁に鉛筆を以つて書かれあり。特に悲惨なるは、赤鉛筆にて五月十九日より六月二十三日までの暦日を数字にて表に作り、最初より二十四日までは線を引きて消されあるも、二十五日以下は消されず。これ二十四日夜、百四十名は監獄より曳き出されて、黒竜河畔に連れ行かれ、ことごとく刺し殺して河に投じられたるなり。

記者一行は同胞の呻吟せしこの獄内に暫し低徊の後、出でて黒竜江河畔に赴く。造船場の前およそ二百坪の空地は一面に血潮に染められ、色既に黒し。これ皆我が同胞の血！縛めの縄にべつとり附着せる、また鮮血を拭ひたる縮みのシャツ等陸に引き揚げられ、蚊におびただしき血潮の飛び散れるなど、眼も当てられぬ惨状なり。同胞が恨みを呑んで毒刃に殪れしこの汀！余等は一步一歩同胞の血潮を踏まざれば進むを得ざるほどなり。余等はそれより津野司令官を訪ふ。津野少将は涙を浮かべ、「我が同胞は一名も残らずことごとく死にました。同情に堪へません。ただその中一人として卑劣な行ひもなく、最後まで屑かつたといふことだけは嬉しいですよ。」

「明治大正国民史」を書いた白柳秀湖は尼港事件の項の結末に「七百の同胞は老幼男女を問はず、悪獣の如き共産パルチザンの手にかかり、永く黒竜江上の煩鬼と化した。この時、彼等が無辜のわが居留民に対して加へた凌侮残虐の甚しき、世界に人道の存する限り、如何なる歴史家も到底これを筆に上すに忍びないであらう」と記してゐるが、前出の海軍士官手記や従軍記者視察記と併せて読む時、この事件の残酷性が我が国民に与へた衝撃の深さを窺ふことができよう。

明治以来、近隣諸民族の革命運動にあれほど同情と支援を惜しまなかつた我国の民族派陣営（所謂「右翼」）が、共産革命に対しては厳しい警戒と否認の立場を取るに至つたについては、尼港事件が大きく影響してゐると考へられよう。政治史のみならず、日本人の精神史の上からも、この事件は大書して記録すべきものである。

共産侵略を洞察した日本

尼港事件は「元寇以来の国辱」として我が国民感情を著しく激昂せしめた。当然ながら対ソ強硬論が高まり、我軍は事件解決まで北樺太を保障占領することになり、シベリア撤兵は大幅に遅れる結果となつたのである。

先に紹介した歴史教科書の記述が、いかに出兵の歴史的意義を歪曲し、我国の侵略意図を印象づけようとする編集方針によつて書かれてゐるかが明らかになつたことと思ふ。ボルシェビキを「民主主義者」と信じ、北満・シベリアの門戸開放の名の下に日本の出兵を妨害した米國と、シベリアから満洲・朝鮮への共産主義の侵入を防止するために駐兵を続けた我国と、いづれに歴史への洞察力があつたかは論ずる迄もなからう。やがてシベリアより満鮮に共産主義が浸透し、遂に満洲事変、支那事変、そして大東亜戦争を導いた歴史の展開は今日掩ふべくもないからだ。

見よ。シベリア、沿海州はあれから七十年を経た今日に於てさへ、米國をはじめ外部に対して完全に門戸を閉ざしてゐるではないか。日本の進出を阻止すれば、シベリアの門戸開放が実現すると信じきつてゐた米國の誤断はこれを以ても明らかであらう。タンシル教授は云ふ。「米國派遣部隊が達成した唯一の成果は、シベリア沿海州を赤

露の無慈悲な支配のために取りのけておくことだけだった」と。また長年、上海で「ファー・イースタン・レビュー」誌主筆を勤めたブロンソン・リーは次の如く断じ去る。

「もし日本がシベリアで単独行動を許されてゐたならば、共産主義のアジア征服計画は紙上のものに終つたであらう。米国のシベリア出兵はアジアを共産党の自由活動の地たらしめたのである」と――。

第六章 米国の報復——ワシントン会議